

# 透析医のひとりごと

## 「透析に関わって 50 年を振り返る」

飯野靖彦



### 1 腎臓とのかかわり—越川昭三先生との出会い

医学部と歯学部をつなぐ渡り廊下の横に医学部の階段教室がありました。当時の医科歯科大学の授業ではほとんど出席はとらず出席者は 20 人程度でした（1 学年 80 人）。真面目な学生だった？ 僕はいつも右横の 2 列目に座っていました。右横の鉄製の重い扉を開けて入ってきたのはステテコに白衣を羽織った小柄なおとなしそうな小父さんです（冷房もない時代です）。それが越川昭三先生との出会いです（写真 1）。僕の水電解質研究の指導者です。

### 2 東京医科歯科大学腎研—優秀な先輩と同僚

卒業後どこに行こうか迷い、外科系は体力的精神的に（痩せたおとなしい医学生でした）無理なので、内科に的を射ました。第一内科はクラスの中でも優秀な学生が希望しており、そういう人たちと競争するのは遠慮したいし、群れを嫌うので×、第三内科は和気あいあいとした医局でしたが、今一つピリッと来ない、残った第二内科ははぐれ狼的な雰囲気紳士である僕には似合わない医局でした。でも結局は、その第二内科腎研に決めたのです。なぜかという、今までのいい子の僕を脱皮して自分のやりたい大きなことをしてみたいと思ったのと、人間的な温かさのある越川先生がいたからです。今から思うと good decision でした。

第二内科の腎研に入局したのは昭 48 年卒の 4 人でした。秋澤、飯野、小笠原、富田です。秋澤先生は透析業界では泣く子も黙る重鎮になっています（透析医学会元理事長、昭和大学客員教授、透析医会会長）。学生時代は授業にほとんど出ずに試験は高得点を取る秀才でした。小笠原先生は甘いマスクで女性にもたナイスガイです（小笠原クリニック院長）。富田先生は真面目な中にいたずらのセンスを秘めた努力家です（元熊本大学教授）。僕を含めたこの 4 人は入局後から今まで仲良く切磋琢磨しております。

同級生ばかりでなく、先輩の先生も優秀でした（もちろん後輩の先生方も優秀ですが）。越川先生をチーフとして腎研は透析班と腎生理班の 2 つに分かれており、富田先生と僕は腎生理班に入り、秋澤先生と小笠原先生が透析班に入りました。腎生理班は今では腎臓食事療法の大家である、椎貝先生（元取手協同病院院長）と出浦先生（元昭和大学教授）が中心に研究していました。透析班では中川先生が日本を代表する透析研究をしていました。中川先生は残念なことにこれから大物になるというところで亡くなってしまいました。

生きていれば日本の透析を引っ張る一人となったと思います。

### 3 腎臓の最初の患者さん

腎研に入って最初に受け持った患者さんは50年たった今でも鮮明に覚えています。奈良の天理よろず病院から紹介のあった糖尿病性腎症の盲目の青年でした。その頃は糖尿病が原因の末期透析患者さんは透析をしておりませんでした。医科歯科では全国でも最先端の透析治療を行っていたのでわざわざ奈良から紹介されました。今では考えられませんが、糖尿病性腎症はPD firstで、Crが20になるまで導入しませんでした。PDと言っても40本ぐらいの重いガラス瓶に入った腹膜透析液をラックにつるし、それぞれを連結管でつなぎ、K調整のためKClを入れ、準備に1時間以上かかりました。それを毎日繰り返すのです。越川先生が毎朝、病室にいる研修医の僕に声をかけてくれたのを覚えています。残念ながら、透析導入が遅かったのか、PDでは効率が悪かったのか、お亡くなりになりました。天理市からきた天理教の方が病室で太鼓をたたき音がいまでも聞こえます。

### 4 横須賀共済病院透析室一笹岡先生と宇田婦長の教え

卒後2年目に横須賀共済病院に研修医として派遣されました。その透析グループを率いるのが医科歯科出



写真1 越川先生受賞のお祝い

前列左から、浅野先生、越川先生、杉野先生、井上先生、秋澤先生（梓内）、後列左から、秋葉先生、笹岡先生、佐々木先生、飯野、北岡先生、富田先生、腎臓財団・本田眞美さん



写真2 自治医大腎臓内科創設期の飯野、浅野先生、草野先生

身の笹岡先生と宇田婦長（透析看護学会）です。その頃は珍しい夜間透析もやっていました。笹岡先生は何をしても許してくれる大らかな人でした。宇田婦長は研修医にも暖かく厳しい母親のような人でした。Kiil型の透析器の幕張りから、透析準備、穿刺、返血、まで一通り指導されました。透析の基礎を学んだ貴重な時期でした。

#### 5 自治医大—浅野先生の透析室創設お手伝い

テキサス大 Kokko 教授講演会で単離尿細管の話聞き、これをやりたいと閃き、日本でただ一人テクニックを持つ自治医大の今井正先生のところに押しかけました。今井正先生の研究室で単離尿細管灌流の研究をする傍ら、循環器内科（細田教授）の中にあつた浅野先生の腎臓班で研究生としてお手伝いしました。腎臓班には3野と呼ばれる、浅野、飯野、草野がおりました（写真2）。草野先生は浅野先生の後の自治医大の教授になりました。僕が最初にゴルフコースに出たのは、自治医大循環器内科のコンペです。名門の日光カンツリーに行く前日に3人で宇都宮まで行って、同じ HALF SET を買って、その足で練習場に行きました。一夜漬けの状態ゴルフをしたので3人とも散々の結果は目に見えています。それがトラウマになったのか浅野先生はゴルフをやらなくなりました。飯野と草野先生はそれにも懲りず今でもゴルフをしています。

#### 6 医科歯科大透析室—武内重五郎先生と丸茂文昭先生

金沢大学教授の武内重五郎先生が医科歯科に赴任してから医局は様変わりしました。カンファランスで臨床の重要性を認識させられました。NIH と Harvard 留学帰りの若輩の僕に透析室を任せてくれました。透析と移植医療に没頭した時期です。武内先生が定年になり、丸茂教授が赴任しました。研究センターの医局になりました。

#### 7 日本医科大学—医療に目覚めた

丸茂教授から“お前は医科歯科にいても教授になれないから外へ出ろ”と医局員の結婚披露宴の待合室で言われて、その場で OK したのも、臨床に目覚めた、楽天的、前向き思想の影響かもしれません。日本医大に移ってから人間性のある本来の医療に関わられたのは良かったと思います。日本医大の仲間や医局員に感謝しています。腎臓移植に専念したのもこの時期でした。

#### 8 透析グループやよい会—甲斐さんと室岡さん

日本医大を定年後、医局員派遣でお世話になっていたやよい会に誘われて勤務することになりました（日本医大教授 柏木先生が理事長）。やよい会設立は松和会の室岡さんと日本医大関連施設として作りました。

つまり、やよい会は松和会グループの一員というわけです。松和会グループの親分である甲斐さんは経営者として成功した人間的に素晴らしい人で、僕のゴルフの師匠です。このグループの特徴は、アメリカの透析グループと同じように経営は事務が、診療は医師が責任をもつ分業制です。医師が経営をすると治療をないがしろにして、利潤追求に走る恐れがあります。事務と医師がお互い協力することが患者さんのためです。

## 9 今後の透析を考える

50年間にわたり透析医療にかかわってきて、随分と進歩したことも多くあります。しかし、まだまだ患者さんの要望に応えるだけの治療には達していないのが現状ではないでしょうか。資源も資金も限られてくる将来を見据えると、透析医療も変革が必要です。患者さんが毎日楽しみにして透析クリニックにくるような施設にするとともに、より効率的、経済的、良質均一な透析医療を目指すべきです。

最後に僕が作ったやよい会の理念と基本方針を掲げます。

やよい会の理念：

医療は、患者さん、その家族、医療者のすべてに幸せをもたらすものでなければならない。

やよい会の基本方針：

1. 患者さん中心の医療を行う。
2. 患者さんと医療者がお互いを思いやる。
3. クリニック内を明るく・気持ち良い空間にする。
4. 最良・最新の医療を提供する。
5. 地域医療に積極的に参加し、総合医療を目指す。

日本医科大学名誉教授/やよい会理事長/あだち江北メディカルクリニック名誉院長（東京都）